

### (3) 伝統芸能

#### ●井手浦の尻振り祭（1月8日）



その昔、出雲の国(現在の島根県)で八岐大蛇(ヤマタノオロチ)が退治されたとき、尻尾が平尾台の麓の井手浦まで飛んできて、その年は稀にみる大豊作になったという伝説に因んだ祭りです。

お尻を大きく振るほど豊作になるといわれ、「(尻を)もっと振れ」の掛け声が飛び交う楽しい祭りです。

#### ●貫のお祓い（3月の最終日曜日）



元和5年（1619年）、時の小倉藩主、細川忠興が宇佐八幡宮の放生会を復活させた際、鈴石(すずいわ)八幡宮(後に荘八幡神社に改称)で、武運長久・五穀豊穰を祈念して“大祓い”の大祭を斎行しました。

それが現在「貫のお祓い」として行われています。

#### ●沼楽（5月3日）【県指定無形民俗文化財】



豊作、除疫を祈願する太鼓踊りとして江戸時代から伝承されているものです。

沼楽の踊りは半楽の形式で楽庄屋1、言上1、杖2、笛4、鉦5、うちわ2、太鼓12の27人で構成され、演舞は杖使いの打ち合いから始まり、言上が終わってから12種類の太鼓踊りが行われ、はじめの8演目は輪踊り、後の4演目は横隊となって踊ります。

●曾根の神幸行事〈開作神事〉（5月3日）【市指定無形民俗文化財】



文政2年（1819年）暴風雨により未曾有の被害を受けた曾根新田の鎮守として、綿都美神社を造営し、五穀豊穰・風鎮汐留祈願の大祭を行ったことが始まりとされています。

1台の山が提灯山、幟山、人形飾山へと三様に变化する形式を持つ市内唯一の祭礼です。

●能行の盆踊（8月16日）【市指定無形民俗文化財】



踊り輪の中心に太鼓を据え、音頭取りの口説き歌に合わせ、輪踊りをします。

弓を引く格好の手振りが特徴で、「ユミヒキ踊」とも呼ばれています。

口説歌の「能行口説き」は、天保6年（1835年）2月21日能行村で実際に行ったお千代と儀平の心中事件を素材に作詞され、旧企救郡の代表的な口説き歌となりました。

●合馬神楽（9月上旬）【市指定無形民俗文化財】



合馬天疫神社の秋祭りに奉納される豊前岩戸神楽です。芸態は、横代神楽と同じ京都郡系神楽で舞振りの流麗さを特徴としています。

神楽の奉納は「おこもり」から始まり、米まき、手草、奉幣、御福、花神楽、五行、四つ鬼、岬鬼、網岬鬼、天岩戸開き、折敷、三本剣、田鋤、木登り、鯛釣り、湯立ての16演目で約2時間の舞いになります。

●横代神楽（10月8日）【国指定重要無形民俗文化財（豊前神楽の一つとして）】



元和3年（1617年）創始と伝えられる高倉八幡神社の神楽。

明治16年頃、上横代地区の人たちが京都郡系の神楽を習得し、高倉神社の氏子でつくる横代神楽講社として子孫が継承している。「米まき」などの舞神楽、「岩戸開き」などの面神楽、座興的な「鯛釣り」、湯立て神楽の「湯立て」の17種目が伝えられています。

●葛原新町楽【市指定無形民俗文化財】



葛原八幡神社の秋祭りに行われる疫病退散の太鼓祭りです。

江戸時代から伝わっていましたが、昭和30年から一時途絶え、昭和51年に復活しました。太鼓打ちは半楽の12人、言上1人、うちわ持ち2人、笛・鉦数人の総勢20人余りの太鼓踊りです。

●しびきせ祭（12月15日）



源平合戦で敗れた平家の一門が安徳天皇は入水したと偽り、安住の地を求め、隠蓑の里にさしかかった時、源氏の追手が迫っているのを知った里人がワラの中に安徳天皇を匿い、追つての目をくらますことができたという伝説にちなんでいる小倉南区隠蓑の里に古くから伝わる祭りです。

※令和元年以降は一般公開されていません

●道原楽【県指定無形民俗文化財】



紫川の上流、菅生の滝に近い道原地区に古くから伝わる太鼓踊り。雨ごい祈願のため、天明7年(1787年)以来、今日まで20数回しか踊られていません。

楽打は田植え踊りの田楽に風流や念仏踊りが加わったものと言われています。道原楽は一子相伝、村外不出で村のしきたりがあればこそ続いてきた伝統の儀式です。

●石田楽【県指定無形民族文化財】



白と黒を基調にした服装の25人による太鼓踊りです。

太鼓打ちが背に負う小幡には「仰神威祈雨」、ウチワの表に「雨」裏に「楽」と大書きしており、雨ごいの楽であることがわかります。